

圖版解説

潘賜筆墨梅圖

京都 某氏藏

驛路春將放

溪橋雪未消

碧波涵影處

恍見老龍腰

容庵

潘氏
徽垣
清暇
文錫

この水墨紙本の小幅、紙は古びてやや黄灰色を帯び、かなりいたんであるが、畫に補墨はほとんど認められない。題詩の關防印の右半部を缺く點から、畫面はきりつめられたものと考へられるが、原初の畫致をそこなつてはゐないであらう。「容庵」なる字號を持つ人物は畫傳に聞えるところがない。そしてこの作が素人の手に成るものであることは、その畫趣からも容易に想像される。

構圖について見ると、その骨格は元から明にかけて行はれた墨梅の常套的な畫面構成の一つの型に屬してゐるといへる。これは弓梢と呼ばれる、僅かな枝梢が畫面にのび塞る元代前半の作風より發するものであらう。畫面の左上方から力強く張り出した太い枯枝は、やや上を向いて途切れ、觀者の眼を惹きつけるアクセントとなつてゐる。これと交叉し、大きな弧を畫いて下に向ふ枝は、畫面中央でわかれ、さらに交はつてそれ／＼畫面の左右下端へと伸びる。下に伸びた枝の尖端は、畫面のはしに接した例が多いから、この幅の下端の切縮めは、餘り多いものではなからう。ただ下に向ふ兩枝にほぼ同等の比重をかけ、ほとんど同じ位置にまで垂れ下つてゐることは、いかにも素人くさいやり方である。一般に職業的畫人の墨梅では、重點を畫面上に片寄せて構圖に統一感をもたせようとしたり、枝を上下左右に交叉させて、一種の網目文様のやうな効果をねらひ、總じて技巧の冴えを誇示する意圖が目立つが、この幅にはかかるテクニクの遊びは見られず、すなほで單純であり、この型の墨梅畫の構成原理を虚飾なくあらはしてゐる。長方形の畫面を無理なく埋めてバランスを保つ墨梅畫のこの構成法は、この幅のやうな下り梅だけではなく、上り梅、横もの、そして雙幅の場合は左右裏がへしといふ風に、應用範圍の廣いものであり、やがて墨葡萄など、墨梅以外のものを畫く場合にも利用されてゐる。またそれだけに、誰が畫いても大した破綻をみせないこの便利な構成法は、構圖上のマンネリズムに陥る傾向を當初から包藏してゐた。この墨梅圖にもややその嫌ひはあるが、素人の筆に成ることが幸しか、かへつて文人畫としての素朴な味を失つてゐないやうに思はれる。

文人畫としての墨梅は墨竹にやや遅れ、北宋末に主として禪僧の間に起つたもののやうである。いはゆる墨花、また廣く水墨畫の主題の擴張と見ることができよう。しかし墨竹よりも技術面でやや高度のものが要求される墨梅は、墨竹のごとく士大夫間にたやすく受入れられなかつたらしい。明以降、四君子の出そろつたのちでも、一般に文人の墨戲の對象は、第一に竹、ついで蘭であつた。元明の墨梅の遺品を通覽すると、畫技の専門的習練をつんだ畫人の作が多い。それらを文人畫としての墨梅といふ觀點から見ると、書卷の氣に乏しい作も往々目に觸れる。このやうな面から考へると、この幅は墨梅にまみ見られる外限の技法なども用ひられず、決して畫技卓拔とはいひ難いが、畫面全體に感じられる天真の氣と淡泊な味はひ、贊の書風とよくバランスのとれた筆づかひなど、いかにも文人畫らしい好もしさをもつ作品である。畫面の左上端、淡い墨で小さな枝が花二つほどつけてのぞいてゐるあたり、枝の方向に花もややゆがみ、この小さな動きが畫幅全體の勢ひと同じ指向性を持つてをり、また中ほどで二分する枝のうち、左方のくねり方が題詩の筆勢とそこはかとなく通ずるあたり、職業的畫家には期待できない文人畫らしい楽しい畫境を示してゐる。

この幅の外宮の蓋には

模 王元章画
僧容庵賛

と墨書し、内宮の蓋の墨書は

梅之繪 竹林海西 容庵賛
王元章畫

となつてをり、添へられた永眞（狩野安信、一六一三—一八五）、養朴（狩野常信、一六三六—一七一三）の外題は、いづれも「王元章筆」元章は王冕の字となつてゐる。しかしこの畫は、見る通り自畫賛であり、容庵とは明初永樂二年の進士、福建浦城の人潘賜の字に外ならない。潘賜の傳は、明末の天啓二年に作られた本朝分省人物考卷七二にも載つてゐるが、續修浦城縣志卷二一の方が詳しいので、それを左に掲げる。

潘至善 洪武中。以人才薦。官戸部郎中。（中略）賜。字文錫。又字容庵。

至善子。永樂二年進士。授行人。奉使日本。時倭新向化。賜莊重詳慎。得使臣體。其王卑辭納款。且謝海寇劫掠。約束不謹狀。歸獻德化書。永樂大典頌。上覽之稱善。命付史館。擢禮部郎中。轉鴻臚寺少卿。再使日本。賜其王冕服及錢鈔綿綺。有加還所獻海寇。令其國自治之。且定十年一貢。人止二百。船止二艘。不得携軍器。違者以寇論。并賜以二舟。爲入貢用。使還陞江西右參政。有摘其詩句相傾陷者。坐落職。洪熙初。起爲南京刑部主事。宣德間。上問老成識大體可使日本者。廷臣以賜對。除鴻臚寺左少卿。賜織金麒麟羅衣一襲。寶鈔二百錠。三使日本。申定前約。使還宣宗深加獎勞。未幾卒。賜操履端方。才思高邁。著有竹梅篇。皇華勝覽。容庵文集若干卷。

すなはち三たびわが國に使した、日明交渉史上に逸すべからざる人物である。右の潘賜の傳と、互證すべき日明交渉に關する彼我の史料との間には抵牾するところがあり、またこの傳記で彼が參與したとされてゐるいはゆる永樂宣德の兩要約について、いろいろと議論があるが、永樂二年進士擢第以來の潘賜自身の官歴はまづ首肯し得るので、いまこの點には深く觸れない。そして不明瞭

な自贊の上の印を「薇垣清暇」と讀むのが正しければ、薇垣は明清代の布政司の異稱であるから、再度の渡日後、江西布政司右參政に陞つた以後の作といふことになる。そして題詩の第一句と第三句から考へると、第三回滯日中の墨戲と見ることができるとはなからうか。潘賜第三次の來朝はわが永享六年、明の宣德九年（一四三四）である。遣明正使龍室道淵はその前年北京に至り、宣宗の宣德八年六月十一日附の國書を受け、歸國の途次同月七月二十四日、杭州仁和縣中館驛に示寂したといふ。わが遣明使と同行來朝する明の使臣、正使雷春、副使潘賜らの官職姓名は、善隣國寶記に收載する右の國書に記されてゐる。

一行は永享六年四月赤間關に到著し、同年六月一日入洛、八月廿一日退京した。翺之慧鳳の竹居清事に、潘賜が信申明篤の詩文を賞讀したことが見えてゐるが（送文明職上人遊大明國序）、彼のこの間の事蹟の一端を語るものであらう。そして翌年春遣明船とともに歸航したものと推定される（小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』による）。さうすれば永享七年の春のはじめ、西日本のいづれかの地で畫かれたものといふことになる。

なほ安信、常信の外題のほか、この幅の傳來を物語るものとして槐記の記事がある。槐記は山科道安が豫樂院近衛家熙の言行を筆録したものであるが、その享保十三年（一七二八）十月二十七日の近衛家の茶會の記事史料大觀本に一八一頁にある。そして同家に傳襲されたことは、大正七年六月の近衛家賣立目錄に、この幅の圖が掲げられてゐることにより、明らかであらう。

御掛物 王元昌カ梅ノ畫ニ、容庵ノ贊、金入一文字印金、中キンシヤ、上下ドンス